

2015MHC 登山講習

アルプス登攀記

春夏秋初冬 MHC 登山講習報告

2015MHC 登山講習「残雪の槍ヶ岳登山」から



主 催 NPO 法人 松本ヒマラヤ友好会《MHC》

本部事務所 松本市島立 4539-7 TEL 47-6197 FAX 47-5685

E-mail : mhc@lily.ocn.ne.jp ホームページ : <http://www1.ocn.ne.jp/~mhfc/>

共 催 松 本 市 山岳観光課 TEL94-2307

後援 長野県教育委員会 松本市教育委員会

信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 毎日新聞松本支局 読売新聞松本支局 産経新聞長野支局
中日新聞社 市民タイムス 松本平タウン情報 長野日報社 SBC 信越放送 NBS 長野放送
TSB テレビ信州 abn 長野朝日放送 テレビ松本ケーブルビジョン FM長野 長野県写真連盟



槍ヶ岳山頂祠

目次

1. 2015MHC登山講習開催のあいさつ	1
2. 2015MHC登山講習―残雪の常念岳報告	3
3. 2015MHC登山講習―花の奥上高地 報告	5
4. 2015MHC登山講習―残雪の槍ヶ岳登山報告	7
5. 2015MHC登山講習―内田良平山岳写真教室報告	9
6. 2015MHC登山講習―奥秩父 金峰山と瑞牆山登山報告	11
7. 2015MHC登山講習―花の八ヶ岳縦走報告	13
8. 2015MHC登山講習―白馬三山縦走報告	15
9. 2015MHC登山講習―夏の常念岳登山報告	17
10. 2015MHC登山講習―剣岳登山報告	19
11. 2015MHC登山講習―槍・穂高連峰縦走登山報告	21
12. 2015MHC登山講習―日本最高峰富士山登山報告	26
13. 2015MHC登山講習―初秋の鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳登山報告	28
14. 2015MHC登山講習―紅葉の涸沢、奥又白を行く報告	30
15. 2015MHC登山講習―焼岳登山と紅葉の上高地散策報告	32
16. 2015MHC登山講習―新雪の常念岳(報告2857m)を登る報告	34
17. 2015MHC登山講習―新雪の燕岳(2763m)と温泉報告	36

●山岳スポーツ振興事業プロジェクト

2015MHC 登山講習開催

・事業目的

現在、北アルプス等を初めとする日本の山々では、中高年登山ブームから、若人の関心を集める幅広い年齢層による市民登山の時代が到来しています。

この市民登山の時代を迎え、山の装備の選び方から山の登り方、行動食や水分の摂り方、高山病対策やレスキューの方法、そして山に咲く高山植物や、山岳撮影のテクニック等を優れたインストラクターより学び、「安全でより楽しい登山」とする学習の場が求められています。

NPO 法人松本ヒマラヤ友好会(MHC)では、市民参加の山岳スポーツ振興事業として、山岳遭難を未然に防ぐことも願い、「安全でより楽しい市民登山」とするために、ヒマラヤ等高所登山経験豊富な講師の指導により、系統的に登山技術を習得し、山岳の知識と登山の楽しさを学べる市民参加による「2015MHC 登山講習」を開講します。



6 月「金峰山・瑞牆山」



7 月「白馬三山縦走」



8 月「槍・穂高縦走登山」



5 月残雪の常念岳

受講者は優れた登山技術を習得することで、あらためて安全登山についての認識を深めて頂き、山岳に対する豊富な知識と経験を積んだ愛好家として、また登山パーティーのリーダーとしても養成されていく事でしょう。

この企画を実施する事で、長野県の美しい山岳があらためて認識され、幅広い年齢層による市民登山が「安全でより楽しい登山」となる事を心より念願しております。



7 月「花の八ヶ岳」



9 月「秋の澗沢と奥又白」



11 月「初冬の燕岳」

写真は MHC 登山講習から

これらの事業は、2016 年 2 月 4 日（木）～2 月 7 日（日）（決定）に、松本駅前井上デパート本店 7 階大ホールにて、「2015MHC 登山講習報告写真展」を「松本ヒマラヤ友好会山岳写真展—北アルプス編」と題し、2015 年度に実施した登山講習の山々と参加者の登山を楽しむ様子等のパネル写真を展示、報告していきます。一般市民の皆様にも、自然や登山への関心を深めてもらうことが出来るでしょう。

・事業内容・実施方法

○2015MHC 登山講習

1)登山説明会

- ①**2015.5/16(土)2015MHC 登山講習説明会** **なんなん広場 (松南地区公民館)**
 ②随時、公民館、学校などでスライド映像を駆使し、説明会を開催

2) 青少年・市民一般登山講習

- | | |
|-----------------|--------------------|
| ①残雪の常念岳 5/2～3 | ⑩富士山登山 8/22～23 |
| ②残雪の乗鞍岳 5/23～24 | ⑪鹿島槍ヶ岳 9/5～6 |
| ③残雪の槍ヶ岳 6/7～8 | ⑫鳳凰三山縦走 9/12～13 |
| ④花の金峰山 6/20～21 | ⑬紅葉の涸沢と奥又白 9/26～27 |
| ⑤八ヶ岳南部縦走 7/4～5 | ⑭焼岳と上高地散策 10/24～25 |
| ⑥白馬三山縦走 7/18～20 | ⑮新雪の常念岳 10/31～11/1 |
| ⑦南ア仙丈ヶ岳 7/25～26 | ⑯初冬の燕岳 11/21～22 |
| ⑧剣岳登山 8/1～8/2 | ⑰スノーシュー講習 2/13～14 |
| ⑨槍穂縦走 8/13～16 | ⑱白銀の硫黄岳 3/12～13 |

3) 山岳写真教室

- ①. 内田良平写真教室 6/13～14 花の奥上高地
 後日 講評会開催、井上デパートで 1/28～1/31 の報告写真展で発表。

4) 初心者雪山登山(青少年・市民一般登山講習と重複)

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| ①. 残雪の常念岳 5/2～3 | ④ 初冬の燕岳 11/21～22 |
| ②. 残雪の乗鞍岳 5/23～24 | ⑤. スノーシューで行く冬の上高地 2/13～14 |
| ③ 残雪の槍ヶ岳 6/6～7 | ⑥. 白銀の硫黄岳 3/12～13 |

5) ザイルワーク・レスキュー訓練

上記 2) 青少年・市民一般登山講習の中で指導ザイルを实际使用し、結び方、操作を覚えます。

6) 2015MHC登山報告「松本ヒマラヤ友好会山岳」写真展

会場 松本駅前井上デパート本店 7階大ホール
 期間 2016年 1/28～1/31

写真教室発表会、市民登山参加者のパネル写真の展示。約 100 点。北ア登山の注意と心得、登山講習の山々と参加者の登山を楽しむ様子等を展示報告します。

○講師・スタッフ

- ①写真講師 **内田良平**・・・日本を代表する山岳写真家。1936 年横浜市生まれ。山岳写真多数発表。



主な作品に「エベレスト街道」「カトマンズ百景」「アンナプルナ周遊」「上高地」「日本百名山」「ヒマラヤ 50 峰・岩雪氷雲そして光」日本山岳写真集団同人、日本山岳会々員。神奈川県横浜市在住 MHC 会員



- ②登攀指導 **鈴木雅則**・・・登山講習の責任者、1950 年東京生れ。松本市と姉妹都市ネパール首都カトマンズとの市民交流を進め、姉妹提携以来 25 年の間に、延べ 350 余名の市民を引率する。ヒマラヤトレッキングでは 5400m～6500m のピークへ延べ約 145 名を登攀隊長として登頂成功に導く。安全登山に多くの実績を持つ。MHC 理事長 松本市海外都市交流委員会カ副部会長 (公益)日本ネパール協会理事、県支部長

- ③**MHC 山岳委員**・・・MHC ヒマラヤ高所 4000m～6500m 登頂経験者、又は登山熟達者
 古幡健夫、上条賢介、松岡いつ子、内山康翁 渡辺直嗣、甕 俊昭、市川浩章
 中村宗晴 近藤 茂、中村治幸、木村郁子、丸山清栄 梅村博通、関口喜人 他



七月白馬三山縦走



十一月新雪の常念岳



二月スノーシュー講習



井上デパート展示会場

5月2日(土) AM6:30 県安曇野庁舎駐車場に8名が集合し、車に乗り合わせ出発する。天候は快晴。新緑が眩しい登山口で準備を整え、AM7:40 登山道を一列縦列で出発する。10分程で、樹齢300年以上の橡の木が立つ“山ノ神”に到着。皆で手を合わせ、登山の無事を祈る。



残雪深い岳樺林の登山道を登る。沢が合流する笠原附近支沢の雪崩跡。稜線に向かって沢筋を直登する。

一ノ沢沿いのダケカンバ林の中、残雪深い山道を登る。2時間程登ると沢が合流する河原に出る。展望が開け見上げると、豪快に聳える白銀の常念岳を望む。ここで、アイゼンを装着して、上方へ伸びる雪に埋まる沢筋を直登する。例年ならある雪崩跡の小山が見当たらず、却って登り易くなっている。



乗越からの展望に疲れも吹っ飛ぶ。 乗越からの槍・穂高の展望。

5/3 山頂目指し出発

一時間程の登りで森林帯を挟む二股に出合う。ここから左側の狭く急な沢筋を登る。一步一步雪を踏み登り続けると、一気に高度を稼ぎ、PM12:30 常念乗越に登り出る。突然正面に、槍ヶ岳から穂高岳への白銀の稜線がその姿を現した。皆歓喜し、今までの登りの疲れもいっぺんに吹き飛ばすようだ。常念小屋で昼食後滑落停止の練習を行う予定だったが、雪が少なく危険なため中止とし、小屋内で講習談義となる。見上げると山頂へ続く稜線には雪が全く無く岩稜があらわとなっている。このまま小屋に沈殿する。



山頂への道標。

岩稜線を一步一步登る

登る右方向に槍ヶ岳を展望

5月3日(日) 晴、AM6:45 全員、山頂を目指し出発する。岩がゴロゴロした夏道をたどり、高度を上げると、北方の彼方に、双耳峰鹿島槍ヶ岳、大きな山容の立山連峰が連なり、西方には、槍ヶ岳の先峰が、青空の下、一層高く天を突いて聳えている。

AM8:45 常念岳山頂 2857mに、見事登頂する。「おめでとう！」皆と笑顔で握手を交わし合う。山頂は、岩肌を表わし、道標と祠がその姿を現している。西面には、白銀に輝く穂高岳連峰の雪稜が、手に取るように大迫力でそそり立っている。その景色に見とれながら、皆で憩いのひとときを過ごす。

南方向に、山頂から続く尾根伝いに蝶ヶ岳が連なり、その西方、雲中に真白な乗鞍岳、木曽の御嶽山の峰々を微かに眺望する。私達は 30 分程展望を楽しんだ後、惜しみながら下山を開始する



5/3AM8:30、常念岳山頂に見事登頂、後方に槍ヶ岳から穂高岳連峰を望む。



山頂から望む、白銀の穂高岳連の勇姿。

AM10:30、無事小屋に到着。早めの昼食を摂り、AM11:45 常念小屋から下山を始める。往路と同じ雪の一ノ沢ルート、滑落を注意しながら降下する。PM3:30 登山口に到着。PM4:15、参加者の車が待つ県安曇野庁舎で解散とする。

「春浅い山麓と、真白な雪に覆われた常念岳。ピッケルとアイゼンを使い、息を切らし登った山頂。白銀に輝く峰々の美しさと共に、心に残る感動的な登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

5月30日 AM8:00、松本市安曇支所に参加者5名が集合、貸し切った松本市バスに乗り込み出発する。天候は晴。新緑萌える梓川沿いを走り、新釜トンネルを抜けると、展望が開け、左に残雪の焼岳、そして道を大きく右に曲がると、青空高く、残雪の穂高岳連峰が望まれる。上高地バスターミナルで下車し、大自然の空気を味わう。出発準備をする青葉若葉の空に、ウグイスのさえずる声が鳴り響いている。



流れる梓川と新緑と残雪の穂高岳



河童橋からの梓川と焼岳

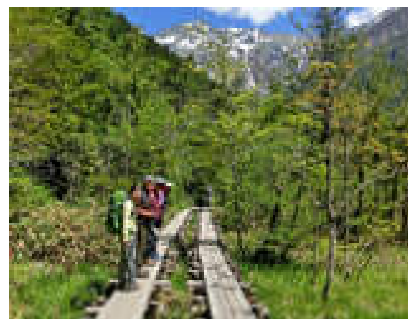


河童橋袂で記念撮影

AM9:00 準備を整え、リュックを背負い、バスターミナルを出発する。雪解け水を集めて飛沫を挙げて流れる梓川、その流れに架かる河童橋から残雪の穂高を仰ぐ。ここから右岸沿いに木道を歩き、明神へ向かう。支流に泳ぐイワナを見つけては歓声を上げる。1時間30分ほどで明神に到着。嘉門次小屋の囲炉裏端に陣取り。塩焼きに舌つつみを打ち、冷たいビールをコップ一杯づつ飲み交わす。「うまい！」



河童橋袂から望む奥穂高岳 3190m



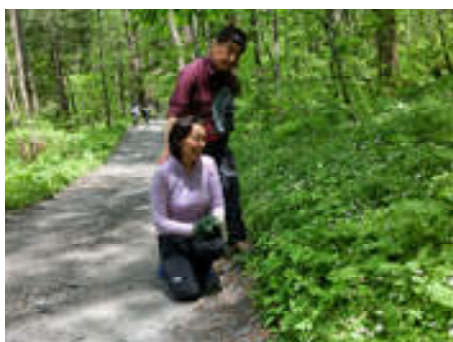
梓川右岸の木道を明神へ向う



嘉門次小屋の岩魚焼き

オオカメノキ

30分程の休憩の後、つり橋を渡り、梓川左岸を明神から徳沢に向うこととする。この付近からは、ニリンソウ、シロバナエンレイソウが一面に咲き、道端にはサンカヨウ、ツバメオモトなど白い花々が咲く。川辺の近く、コバルト色のエゾムラサキ、薄紅色のベニバナイチヤクソウが姿を現すと、PM1:00 折り返し地点の徳沢に到着する。徳沢の草地に座り、前穂高岳の先鋒を仰ぎながら、昼食を摂る。



林道端に群落するニリンソウと齊藤夫妻



ニリンソウ



フッキソウ



サンカヨウ



ツバメオモト



シロバナエンレイソウ



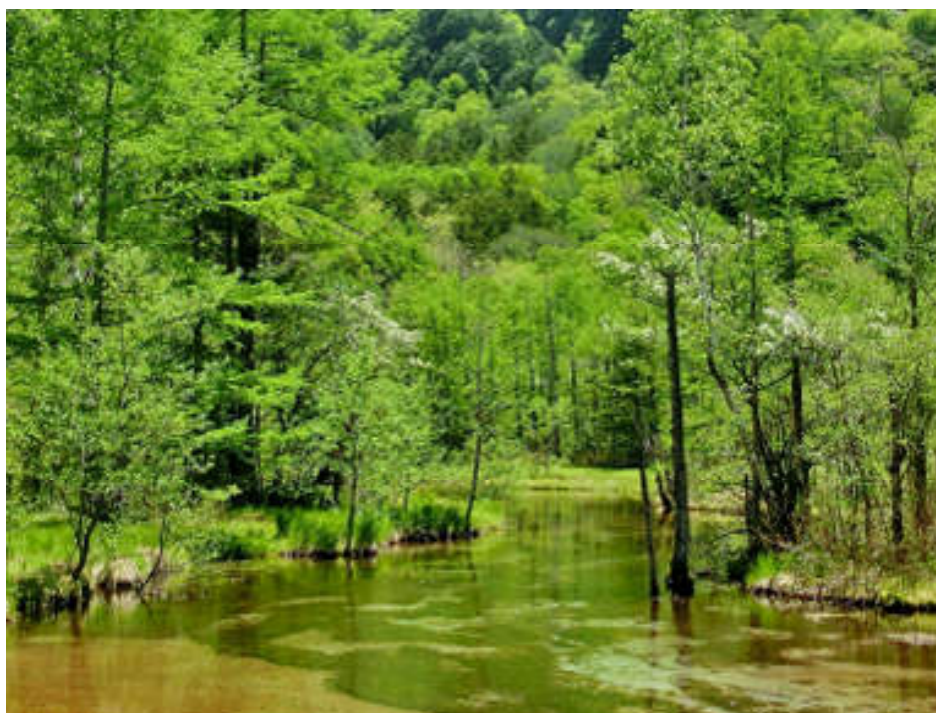
エゾムラサキ

皆、残雪の峰々と新緑のみずみずしさ、そして咲き競う花々に、心洗われる気持ちとなる。休憩後、梓川左岸を上高地へ引き返す。小梨平を抜け、再び河童橋を渡り、PM3:45 今日の宿上高地アルペンホテルへ到着、泊す。ホテルでは清水を沸かした広い湯船につかり、今日の疲れを癒す。

31 日、夜半雨が降り、薄曇りの朝を迎える。朝食後、AM8:00、準備を整えホテルを出発。朝の河童橋を渡り、鳥のさえずる梓川左岸を、雲湧く上空に聳える穂高岳を展望しながら歩く。途中林の中を抜けて、東に曲がりしばらく歩くと赤い屋根の帝国ホテルへ辿り着く。この喫茶室で休憩とする。



萌える新緑と梓川の流れと架かる河童橋と雲湧く空にそびえる残雪の穂高岳



大正池畔から望む穂高岳

喫茶室では、暖炉の前のテーブルに陣取り、特性コーヒーとケーキを賞味する。その後田代橋から田代湿原を経由して大正池畔に進み、河原に座り昼食を摂る。PM1:00 大正池ホテル駐車場に迎えに来た貸切の松本市バスに乗り、PM2:00、松本市安曇支所に到着、解散とした。「梓川の清水と上高地の新緑と穂高岳の残雪、そして花々の多さと美しさを再認識した、山旅だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

6月6日 AM4:00 快晴の松本に参加者6名が車に乗り合わせて出発。AM5:00 沢渡で3名が加わり、2台のタクシーに乗り換え上高地へ向う。AM6:00 準備を整え上高地を出発。後から1名が出発に遅れ、追いかけて来て徳沢先で合流、総勢10名となって AM9:15 横尾に到着する。

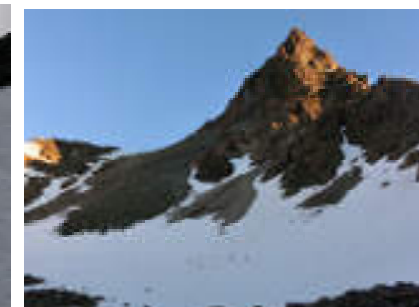


上高地～横尾間の林道を行く

槍沢ロッジ下部満開の山桜に会う

ババ平から槍沢溪流を埋める残雪

横尾からは梓川溪流沿いに進む。道沿いには、ニリンソウ、サンカヨウ、ツバメオモトの花々が、朝陽に照らされ咲いている。坂を登り一汗掻くと AM11:10 林の中の槍沢ロッジに到着、ロッジ内で早めの昼食を摂る。中休止後、早々と出発。登り 30 分程のババ平上部からは、槍沢溪流を埋める残雪を踏んで登る。槍沢を仰ぐ大曲りから、アイゼンを装着し、雪斜面を登り続け PM3:15 グリーンバンドを乗越し、PM4:35 殺生ヒュッテに到着、泊す。



槍沢の大斜面をステップ切って登る

グリーンバンドから上方を仰ぐ

殺生小屋から仰ぐ、朝陽に輝く槍ヶ岳

翌9日 AM4:30 起床、東の空が橙色に染めて朝陽が昇り、仰ぐ槍ヶ岳が朝陽に輝いている。AM6:30、出発。途中、ロッジ上部の雪斜面で滑落停止の練習を繰り返し行い、雪面滑落に備える。岩稜がむき出しになった東鎌尾根を登り詰め、AM8:10 槍ヶ岳肩に到着する。



東鎌尾根を登る

槍ヶ岳岩峰 100mを登る

AM8:45 槍ヶ岳山頂 3180mに見事登

小休止後、軽荷で高度差100mの無雪の大岩峰を登る。岩場にスタンスを確保し、しっかりと手で握り、壁に取り付けられた鎖と鉄梯子を使い、必死で攀じると、AM8:45、微風の槍ヶ岳山頂に全員見事登頂。皆満面の笑顔で握手を交わす。誰かが持ってきた赤ワインで乾杯し「がんばったね、おめでとう！」と祝い合う。

山頂からは雲海上に西方に残雪頂く笠ヶ岳が望まれ、その後方に加賀の白山を遠望する。北に立山、白馬岳、東に浅間、八ヶ岳、富士山、南アルプス連峰、南に穂高、乗鞍、御嶽山など、中部山岳の全ての山々

全員赤ワインで乾杯！

を眺望する。皆、写真を撮りあったり、山の名を懐かしんだり、はしゃぎながらこのひと時を味わう。

山頂に 30 分程の憩いの後、岩壁を慎重に降りる。槍肩に降り、山荘で熱いコーヒーの歓待を受け、AM10:00 下山開始。雪の急斜面を、滑落停止の練習を繰り返しながら降下する人、シリセードで一気に滑り降りる人、それぞれ雪の槍沢を楽しみながら下山していく。



残雪を踏んで槍ヶ岳を背景に、槍ヶ岳肩へ向かう



槍ヶ岳山頂から雲海上に穂高岳連峰、を望む。

PM12:10 槍沢ロッジに全員が到着。ロッジ特製カレーで昼食を摂り、中休止後は横尾を經由して、PM5:00 上高地、タクシーで PM5:40 沢渡へ向かい、そこから車に同乗し PM6:50 松本へ帰還、最終解散とした。

「6 月の残雪の槍ヶ岳は、雪の大斜面を克服して登頂する喜びを、心底味わった登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

6月13日 AM8:00、上高地アルペンホテルに7名全員が集合し、内田良平さんを講師に写真教室の講習が始まった。講師の挨拶と撮影要領の説明の後、AM9:00、カメラ機材を担って、梓川右岸の河原を歩き、焼岳を撮影。河童橋を渡り、左岸沿いに小梨平方面へ向う。上空は薄曇り空。雪解け水を集めて流れる梓川、その川岸のケショウヤナギは、萌えるような新緑に染まっている。

参加者は、内田さんから適切な撮影指導を受け、三脚を立てては、撮影のシャッターを切る。



残雪の穂高を仰ぐ大正池畔



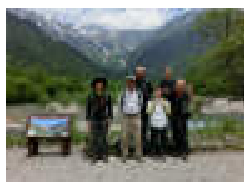
梓川畔からの焼岳



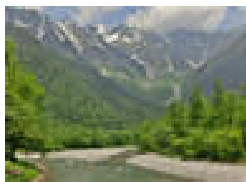
新緑萌えるケショウヤナギと穂高岳



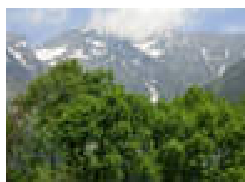
小梨平では、食堂に入り、熱いコーヒーをすすりながらガラス窓から雲間の穂高岳を展望する。11時、名残惜しい、新緑の上高地を後に、乗鞍岳へ向かう。12:00 今日の宿、乗鞍岳を仰ぐ番所のペンション「ほうき星」に到着。ここで昼食を摂り、早速一ノ瀬園地に向かう。一ノ瀬園地は、薄紅色に咲く鬼ツツジが、今を盛りと咲き誇っていた。皆、先を急ぐように撮影を始める。



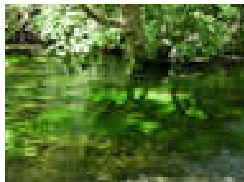
穂高を背景に記念撮影



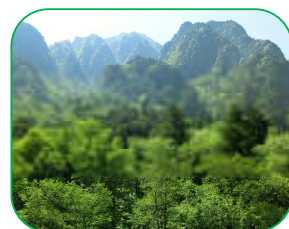
河童橋袂から穂高岳



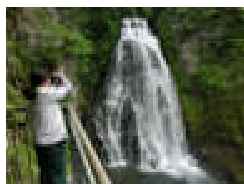
ケショウヤナギと穂高岳



梓の清水



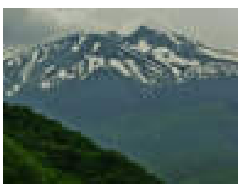
新緑と六白山



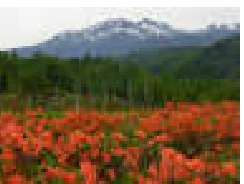
番所の大滝を撮影



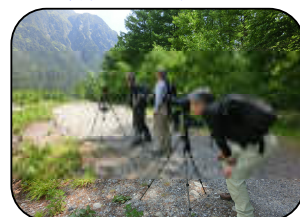
一ノ瀬園地撮影風景



白樺峠付近からの乗鞍岳



一ノ瀬園地の鬼ツツジ



梓川左岸の撮影

撮影に堪能して、PM4:00 宿へ戻る。豪勢な夕食後、食堂内で今日撮影した作品を パソコンとプロジェクターを使用し、壁に映し出し、講評を受ける。PM10:00 過ぎまで山岳撮影談義が行われた。



一ノ瀬園地の小さな池と乗鞍岳



鬼ツツジと乗鞍岳



善五郎の滝と乗鞍岳



鬼ツツジ咲く乗鞍高原一ノ瀬園地

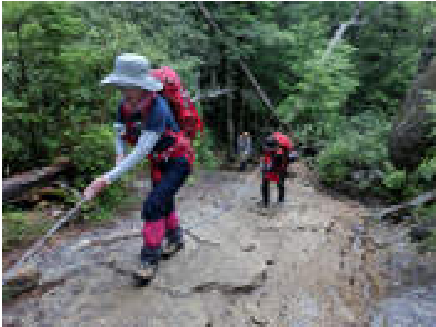


乗鞍高原番所、落差 40m の番所大滝

6月14日 AM4:00 起床、空は薄雲の朝を迎える。朝飯前、各人機材を持って、昨日の撮影場所へ向い、シャッターを切る。朝食後は、大展望を期待して白樺峠方面へ向かう。PM11:30、番所まで下り、いがやスキー場麓の食堂で、全員大盛ザルソバで腹を満たす。番所大滝で最後の撮影を行い、その後車に同乗し、PM3:00 県松本合同庁舎駐車場で解散。PM3:15 松本駅に内田さんを見送り、最終解散とした。

MHC 登山講習責任者	MHC 理事長	鈴木雅則
-------------	---------	------

6月20日(土)AM6:00、7名が1台の車に乗り合わせて松本を出発。曇天模様の天気。一路、中央高速道を走り、須玉インターで降りて、小一時間山道を走ると、AM7:45 瑞牆山荘登山口に到着する。準備を整えAM8:15 出発。森林帯を抜け、登り1時間で富士見平小屋、さらに1時間で大日小屋脇を経由してシャクナゲ林の急坂を登る。しかしどうやら花々は、高い気温と風雨により、盛りを過ぎ地面に散ってしまっていた。



森林帯を抜け、富士見平小屋へ



岩峰大日岩付近のシャクナゲ



急登路を登る

登り30分で100mの岩峰大日岩脇を過ぎて、さらに急登路を登り続け、途中林の中で昼食を摂る。中休止後、岩石帯を30分程登り詰め、砂払ノ頭と呼ばれる岩稜線に登り出ると展望が開ける。

しかし霧が覆い、視界の効かない滑りやすい岩稜線を登り続ける。花崗岩が積み重なった岩場では、クサリを頼りに登り、あるいは這うように攀じって登り続けると、眼前に大きな岩塔、五丈岩の姿が近づいてくる。



岩稜線を登る

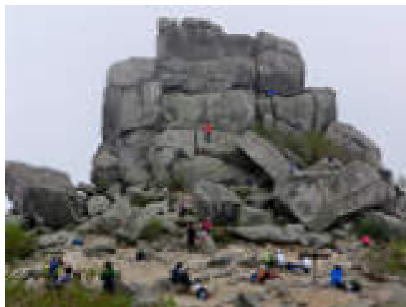


岩塔五丈岩の姿



金峰山の頂に全員登頂「バンザイ！」

五丈岩を右に見上げ、疲れた足取りで岩石群の悪路を登り詰めて行くと、PM2:00 標高2599mの金峰山の頂に全員登頂する、「バンザイ！」。山頂からは、霧雲が覆い遠望が効かない。20分ほど休憩後、頂上の北側直下に建つ金峰山小屋に下る。PM3:00 全員到着、泊す。小屋内では宿泊一番乗り、寝床も決まると、皆集まり、ビール等を飲み交わし、ほっと一息つくことができた。明日の好天を祈って、AM8:00 就寝する。



五丈岩の岩峰



朝の金峰山小屋付近雲海



雲海に浮かぶ八ヶ岳と瑞牆山

6月29日(日)夜半雨が降る。AM4:30 起床。雲海が広がり上空は晴、八ヶ岳が雲海上に浮かぶ。朝食後、準備を整え、AM6:30 出発する。岩稜線を慎重に下降し、シャクナゲ林を抜けて、AM9:40 富士見平小屋へ到着する。中休止後、AM9:55 瑞牆山を目指して、いざ出発する。歩き出すと木々の間から、瑞牆山の大きな岩峰群がそそり立って見える。森林帯の中、一旦下降し、一休みの後、沢筋の悪路をひたすら登る。

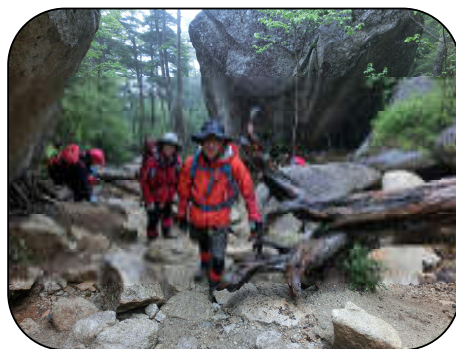
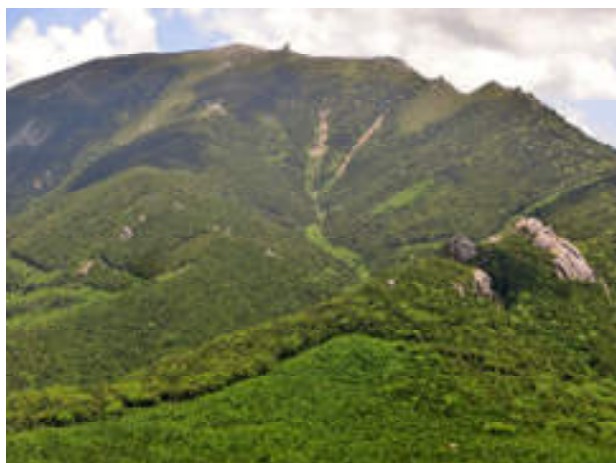


木々の間から瑞牆山大障壁を望む

沢筋の悪路をひたすら登る

PM12:15 瑞牆山頂 2230mに見事登頂

シャクナゲ林が谷間を覆う暗い急登路、登る途中小雨が降り続く。倒木を越え、大きな岩の間を抜け、一歩、一歩急坂を登る。山頂近くの鞍部から、北へ回り込み、岩場に架けられたロープを頼りに、体を迫り上げて、シャクナゲ林のトンネルを抜けると、PM12:15 瑞牆山頂 2230mに見事登頂する。「おめでとう！」登って来た反対側は数百mの大絶壁となっていて、眼下を覗くと身が震えるようだ。



倒木を越え、大きな岩の間を抜けて登り続ける

晴れていると望まれる神々しい金峰山 2599m



おっと危ない、転がりそうな大岩を、杖と手で支える？



霧に煙る瑞牆山二二三〇mの岩峰群

小雨降る天上のような頂に、30分程憩い、昼食後下山を開始。往路と同じ登山道を、緊張しながら下降する。PM2:15 富士見平小屋に到着。小休止後、軽い足取りで森林帯を下り、PM3:15 登山口に無事到着する。そこから車に再び同乗し、往路と同じ道を引返し、須玉インターから高速を走り、PM4:40 松本へ到着、解散とした。

「シャクナゲ林に彩られた金峰山と瑞牆山、その美しさと足元の悪い岩石群の登降を学んだ登山講習だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

7月2日 AM6:00、松本に参加者7名が集合し、2台の車に乗り合わせ、出発。高速道を走り、諏訪南インターで降り、八ヶ岳山麓を登り、AM7:00 最終美濃戸口で2名と合流し、総勢9名となり、美濃戸近くまで車で入り、準備を整え AM8:30 美濃戸から登山を開始。



北沢登山道を行く



シロバナヘビイチゴ

オサバグサ



急坂の森林帯を登る

天候は曇天模様。林道を抜け、ミヤマキスミレ、シロバナヘビイチゴの花々が咲く北沢沿いの登山道を行く。赤岳鉱泉では、中休止後、急坂の森林帯を登る。視界の効かない霧の中、鮮やかな紅色でコイワカガミが輝き、ひっそりとオサバグサが咲く

AM12:00 森林限界から赤岩の頭に登り出る、晴れていれば北方に北アルプスが望まれるが、霧が覆い、展望が効かない。ここから岩稜線を一步一步登り進み、PM12:45 霧が舞う硫黄岳山頂 2760mへ登頂する。

山頂に15分程休憩して濃霧の中、ケルンを頼りに縦走路に向かう。PM2:00 硫黄岳山荘に到着、泊す。途中道端のコマクサ、ウルップソウ、オヤマノエンドウ、ハクサンイチゲ、イワウメ、チョウノスケソウなど、花々の多さと可憐に咲く姿に感銘する。



岩稜線を一步一步進む



硫黄岳山頂に見事登頂



ウルップソウ

チョウノスケソウ

翌3日 AM6:30 出発。上空は晴れ、高い雲海が広がり、北アルプス、中央アルプスの峰々の先鋒が青く浮かんでいる。風は無く、コマクサが咲き始めた砂礫帯を登り、狭い岩稜線を登り、鎖を頼りに岩場を這い登ると AM7:30 横岳山頂 2829mに登頂する。



硫黄岳を背景に岩礫帯を行く



コマクサ



ミヤマシオガマ



横岳山頂に見事登頂

ここからは、花咲く狭い岩稜線を登り降りしながら1時間程進む。切り立った岩稜に咲くツクモグサなどの花々に緊張感がほぐされる。地藏尾根からの合流点、地藏の頭を越えると赤岳展望層に到着する。

赤岳展望荘内で熱いコーヒーを啜りながらの一息後、元気を取り戻し、主峰赤岳の岩峰の登攀に取りかかる。岩稜に取り付けられた鎖を頼りに登り続け、AM9:30 主峰赤岳 2899mに全員登頂する。山頂からは、南方向に南アルプスの北岳、甲斐駒ヶ岳。鋸岳の峰々が雲間に見え隠れしている。



狭い岩稜線を行く



赤岳へ、鎖を頼りに登る



主峰赤岳へ全員見事登頂



雲間に見え隠れする主峰赤岳と背景に連なる南アルプス

ひと時の憩いの後、帰路は、鎖を頼りに岩場を慎重に下り、急坂の文三郎道を経て、PM12:00 行者小屋へ。昼食後、赤岳鉱泉を経て、北沢ルートを下り PM3:00 美濃戸山荘到着。その後は昨日と同様にし、PM5:00 松本へ無事到着、解散とした。

「手強い峰々を縦走し、一気に踏破した喜びの余韻」を残す登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

7月18日 AM5:00、参加者5名が車に乗り合わせ松本を出発。白馬村役場駐車場で2名が合流し、総勢7名となって、AM7:30、1台の車に乗り合わせ猿倉登山口駐車場へ向かう。天候は雨模様。駐車場で全員雨具を着用し AM8:30 登山口を出発。林道を小一時間歩き、緩やかな登山道を暫らく登ると、大雪溪の末端の白馬尻に到着する。



白馬尻から仰ぐ大雪溪



大雪溪を登る



大雪溪を登り切りガラ場を詰める

白馬尻から見上げる大雪溪は、上部は濃霧に覆われ、登攀を阻むように流れ落ちている。小休止後、15分ほど岩道を登ると、大雪溪登攀地点に辿り着く。吹き下ろす冷風に、体を冷やさぬように一枚着用し、持参したアイゼンを装着し、雪溪を登り始める。一步、一步固い雪溪に足場を確認しながら登る。



急斜面の小雪溪のトラバース



テガタチドリ



ミヤマオダマキ



白馬岳山頂に登頂

1時間半ほどで、大雪溪を登り切り、溪流の間のガラ場を詰めて登り、今度は急傾斜の小雪溪をトラバース気味に登る。小雪溪の上部も雪溪が続き、トレースを頼りに登る。葱平を過ぎ、ガラ場を登り続けると、霧雨の中、突然、稜線近くに建つ村宮頂上宿舎の建物が現れる。頂上宿舎で暖を取り、元気を取り戻し、主稜線に登り出ると、風に揺れるウルップソウ、ハクサンイチゲの花々が咲く緩やかな坂道を登る。ようやく M3:00 白馬山荘に到着、泊す。今日の行動は霧雨と強風の為、小屋に沈殿とする。

翌19日雨止まず、強い西風と霧雨の中、AM6:30 軽荷で頂上を目指しジグザグ道に登る。AM6:50。石道標立つ白馬岳山頂 2932mに全員登頂する。「おめでとう！」視界は全く効かない。15分程で下山開始、小屋に戻る。AM7:30 全員荷を背負い、杓子岳目指し強風の主稜線を行く。ウルップソウ咲く稜線を下り、最低鞍部から急傾斜の岩礫帯を登り詰めれば、AM10:00 杓子岳 2812mへ登頂する。



杓子岳への岩礫帯を登る



杓子岳山頂に見事登頂



ウルップソウ



ミヤマシオガマ

白い岩礫帯の稜線から鞍部に降りて西風に吹かれながら再び1時間も登ると、霧のAM11:30 白馬鑓ヶ岳 2903mへ登頂する。しかし、もし晴れていれば、山頂からは、南に唐松、五竜、鹿島槍ヶ岳が連なり、北に聳える白馬、杓子岳を合わせると、後立山連峰全山を望むことが出来る。風を避けて這松の下、昼食を味わい、談笑のひと時を過ごす。全員の記念撮影の後、先を急いで縦走路を下る。



風に吹かれながら白馬鑓に登る



ハクサンイチゲの群落



白馬槍ヶ岳に見事登頂

砂礫質のガラ場を下り、主稜線の分岐からはチングルマ咲く大出原に下り、岩場では、クサリを頼りに急坂を降下すると、PM2:30 鑓温泉に到着。泊す。ここは日本一標高の高い温泉として有名。温泉に浸かり、ビールで乾杯し、登山の疲れを癒す。



雷鳥が姿を現す



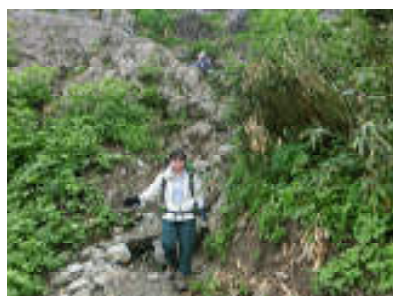
オヤマノエンドウ



クルマユリ



チングルマの群落



岩場のクサリ場を降りる



鑓温泉の湯船



テント場からの鑓温泉

21日、雲間から3日ぶりの朝陽が輝く。AM6:30 支度を整え、下山を開始する。残雪を下り、溪流を渡り、ガレた山腹を巻き、高度を下げる。振り仰ぐと縦走してきた白馬鑓の稜線が眩しく望まれる。



鑓温泉からの雪溪の下り



稜線を仰ぐ



水芭蕉咲く下山路

AM11:45 猿倉に到着。食堂でカツカレーの昼食後、往路と同じように車に乗り合わせ、国道を走り抜け、PM3:30 松本で最終解散とした。「雨と霧と強風の白馬三山の峰々を踏破。冷えた身体を鑓温泉で温め、辛いながらも思い出深い登山となった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

7月25日 AM6:30 豊科駅北、県安曇野庁舎駐車場に、参加者9名が集合。2台の車に同乗し、一ノ沢登山口へ向う。AM7:30 準備を整え、登山口から一列縦列で登山開始。上空は雲が湧く晴れの天気。登山口から10分、樹齢400年の橡ノ木を祀る「山の神」で手を合わせ、登山の安全を祈願する。ここから溪流左岸沿いのコマドリが鳴く森林帯の中、緩やかな登りの登山道を進む。



山の神で手を合わせる



ニッコウキスゲ



オオバギボウシ



胸突き八丁の急坂を登る

2時間程で一ノ沢支流が合流する笠原出合に登り出る。小休止後、一旦対岸に渡り急坂を20分登り、再び左岸に戻り、しばらく河原を登ると山腹を巻く胸突き八丁にたどり着く。山腹の斜面には、オオバギボウシ、ニッコウキスゲの花々が咲き競う。

左岸沿いの山腹の巻き道を登り続けると AM11:00 最後の水場に到着する。ここで冷たい水を補給し、森林帯の中の急坂をひたすら登る。第一、第二ベンチで休憩しながら高度を上げる。登る正面に豪快な常念岳稜線を仰ぐ。低木帯を抜け、這松帯が見えてくると PM12:30 ようやく常念乗越に登り出る。



森林の急坂を登る



キバナシャクナゲ



ミヤマダイコンソウ ようやく常念乗越に登り出る



乗越からは、正面に常念小屋の赤い屋根越しに、雲に隠れる槍・穂高連峰の稜線を望む。小屋に泊す手続きをして、昼食後、PM1:30 荷を置き軽荷で横通岳へ向かう。振り返ると常念岳の姿が快々しい。砂礫質の登り斜面に咲くコマクサを足下に見ながら、PM2:45 横通岳 2760m山頂に登頂する。

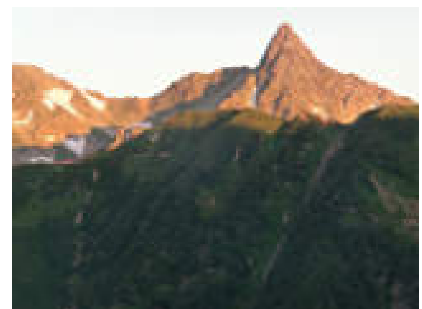
山頂からは、東側眼下に安曇野平が望まれ、その後方に霞む浅間山が噴煙を上げている。PM4:00 小屋に戻り泊す。小屋内は夏山の混雑時であったが、風雨の音の無い静かな夜であった。



昼食後横通岳へ向かう



横通岳に見事登頂



26日早朝あかね色に輝く槍ヶ岳を望む

26日早朝、東の空が茜色に染まり、雲海から朝陽が昇る。西に槍ヶ岳、穂高岳の重厚な岩峰が薄紅色に染まっていく。上空は快晴、無風の静かな朝を迎える。AM6:30、参加者9名全員が軽荷で常念岳山頂を目指す。花崗岩石がゴロゴロと積み重なった、急傾斜の登山路を登る。所々の岩陰にミヤマダイコンソウ、這松の陰にキバナシャクナゲが咲いている。

西に槍ヶ岳を望みながら岩稜線を登り続け、7 合目付近で小休止、北方に頸城三山の妙高山、火打山がシルエット状に望まれる。そして登る前方を見上げると、積み重なった花崗岩石の山頂に人が集まっている。一步一步登り詰め、AM8:00 常念岳の頂きに 2857m に全員見事登頂する。「おめでとう」「バンザーイ！」。



横通岳方面から望む常念岳

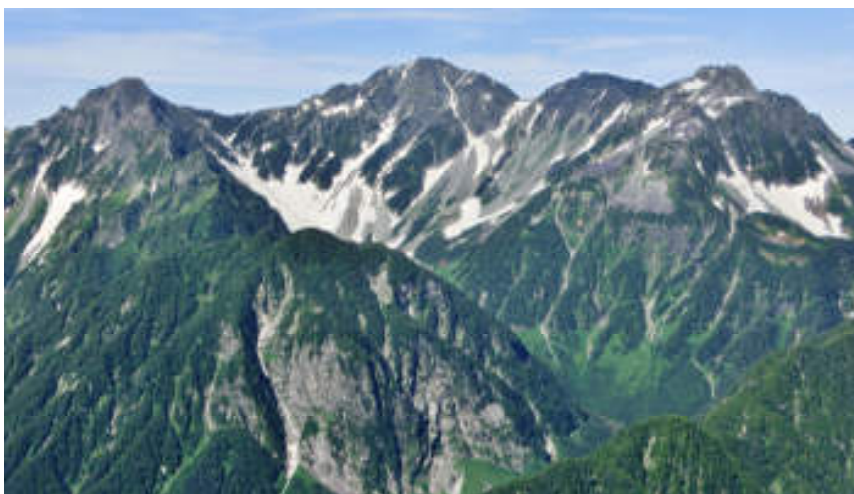


横通岳を背景に岩稜線をを登る



AM8:00 全員常念岳 2857m に登頂

頂に建つ祠の下、無風快晴の山頂に全員憩いのひと時を過ごす。視界は 360 度の大展望、中部山岳の峰々を余すことなく望まれ、南西側はすぐ間近に、豪快な穂高岳連峰の全貌が迫ってくる AM9:00 下山を始める。AM10:15 常念小屋に引き返す。小屋内では早めの昼食を摂り、AM11:30 下山を開始する。



迫ってくる豪快な穂高岳連峰の全貌



山頂から東側、富士山を遠望する

下山ルートは往路と同じ道を引返す。PM3:15 登山口に到着。2 台の車に同乗し、参加者の車の待つ県安曇野庁舎駐車場に向かい PM4:00 解散とした。「安曇野の金字塔、常念岳。いつかは登りたいと思う情熱を失わず、ついに登頂を果たした参加者の皆様に、心から拍手を送りたい。」登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

2015MHC 登山講習 剣岳 2999m登山講習報告書

8月1日快晴 AM7:00、松本市民をはじめとする参加者18名は、集合場所黒部アルペンルート発着地、扇沢に集合。バス、ケーブルカー、ロープウェイを乗り継ぎ、AM9:15 室堂ターミナルに到着。階段を昇り、明るい外へ出ると、3000m峰立山連峰が全山その姿を現している。見上げる上空は青空。ここで準備を整え、AM9:45 岩の殿堂剣岳 2999mを目指して出発する。



立山を望み整備された道を行く



雷鳥平を眼下に新室堂乗越に向かう



ハクサンイチゲ



イワギキョウ

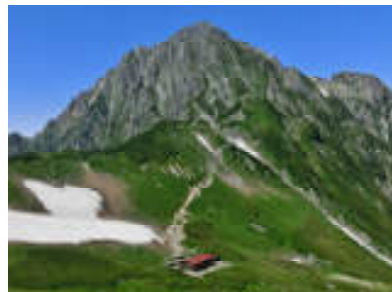
室堂からは、整備された道を雷鳥沢に一旦下降し、西に向かって木道を歩き、2時間程で大日岳との分岐新室堂乗越に到着。ここからハクサンイチゲ、チングルマの花咲く尾根道をジグザグに登り、途中休憩して昼食を摂る。PM1:15、別山乗越に登り出る。ここで剣岳全貌を望みながら、剣御前山腹の雪渓を横切り、岩場を下降していくと PM2:45 今日の宿、剣山荘に到着、泊す。



別山乗越を目指し花咲く尾根道を登る



剣御前山腹の雪渓を横切る

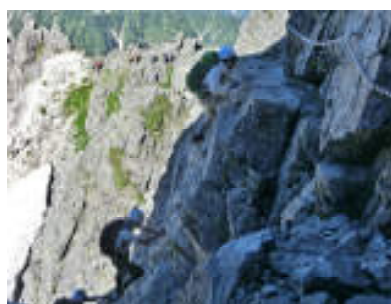


剣山荘と剣岳

翌2日、静かな快晴の朝を迎える。AM3:30 朝弁当で早朝食を摂り、準備を整え夜明けを迎える AM4:50 剣山荘を出発する。30分程で一服剣を経て、正面に高々とそそり立つ前剣岩峰を小1時間で乗り越え、AM7:00 山頂に立つ。



急峻な岩場の登攀



カニのタテバイ岩壁を登る



剣岳山頂に全員見事登頂

前剣からは、急峻な岩場が連続する。要所に取り付けられた鎖を頼りに、僅かな岩の凹凸に足場を確保し、手がかりを確認して、岩場を登り続ける。最大の難所、垂直岩壁カニのたてばいに取り付くと、まず、岩に差し込まれたピンに足を掛け、体を迫り上げ、一本の鎖を頼りに岩壁を攀じる。

岩壁を力の限り振り絞って攀じ登り、安全な岩場に一時集合して全員の無事を確認。そこから緩やかな岩稜線を20分程登りつめると AM8:45 岩峰の頂、剣岳山頂 2999mに全員見事に登頂する。「バンザーイ！」「おめでとう！」握手を交わし、互いの健闘を讃え合う

山頂で 20 分程の至福の時を経て下山開始。絶壁のカニのよこばいも難なく降下し、その後の下山は、往路とほぼ同じルートを下降する。AM11:15 一服剣で全員集合して、顔を見合わせ安堵感を味わう。PM12:00 剣山荘に到着。山荘内で温かいカレー昼食を摂り、下山を急ぐ。PM2:10 別山乗越、急ぎ歩いて PM4:20 室堂ターミナルバス改札口に到着する。



剣岳の全貌 2999m



カニのタテバイを下降する。



山麓に群落するコバイケイソウ

PM4:30 長野方面行黒部アルペンルート最終バスに乗車し、PM6:00 扇沢到着。ここで自由解散とするが、松本方面の参加者は、車に乗り合わせ PM7:00 県松本合同庁舎駐車場に到着し、最終解散とした。「勇気と情熱を頼りに、憧れの剣岳岩峰の登頂を挑んだ参加者の皆様に、心から拍手と敬意を表したい。」登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

8月13日 AM6:00、参加者5名が松本に集合し、車に乗り合わせ出発、AM7:00、沢渡で2名と合流し、総勢7名となって、2台のタクシーに乗り換え上高地に向う。準備を整え AM8:00 過ぎ、上高地を出発する。天候は雨模様、ミヤマアジサイが満開に咲く林道を進む。徳沢を過ぎると時折野猿の姿を見かける。PM12:15 涸沢との分岐、横尾に到着、昼食を摂る。



AM8:00 上高地を出発、明神を通過。

二の俣の吊り橋を渡る

ミヤマアジサイ

30分程の休憩後、槍沢に向けて、森林帯の狭い登山道を一列縦列となり進む。一時間程で一の俣の丸太橋、しばらくで二の俣の吊橋を渡り、峡谷の森林帯の急坂を登ると PM3:00 槍沢ロッジに到着、泊する。



ロッジからババ平へ向かう

ババ平から東鎌尾根を望む

大曲へ向かう道に行く

8月14日、AM6:30 槍沢ロッジを出発。天候は晴。槍沢の溪流に沿って 30分程の登りで、ババ平に到着。狭い平地に所狭しと、テントが張られている。ここから低木帯となり、左に横尾尾根、右に赤沢岳がそそり立つ峡谷に梓川源流が流れ、前面に東鎌尾根の稜線が遥かな高みに望まれる。



ミヤマキンポウゲ



ハクサンフウロ

槍沢の雪渓を登る

百曲りの登山道を一步一步登る

梓川源流沿いの緩やかな登山道を登ると 30分程で槍沢へ屈曲する大曲りへ出る。ここは東鎌尾根最低鞍部、水俣乗越への分岐にもなっている。視界が開け、槍沢上部を仰ぐと主稜線上に中岳 3084m、大喰岳 3101mが聳え、その間から幾つかの沢が流れ落ちてくるのが望まれる。積雪期には、雪崩の巣となる危険地点だ。

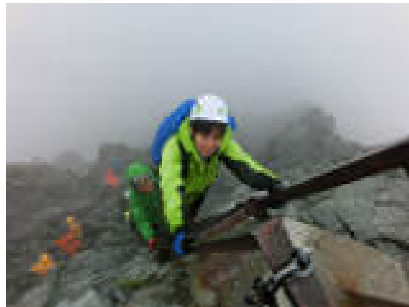
シナノキンバイ、ハクサンフウロ等の花々が咲き競う、槍沢の山斜面の百曲りの登山道を、一步一步登る。いよいよ急となったジグザグ道を登り詰めると AM10：00 這松が帯状に連なるグリーンバンドに登り出る。晴れていれば展望が変わり、登る前方に大きく、三角推形状の槍ヶ岳が間近に聳え立ち、その素晴らしい姿に登山の疲れが、いっぺんに吹き飛ばはずだったが、今日は霧が深く殺生の小屋も霞んでいる。



グリーンバンド下の急坂を登る



槍ヶ岳の岩峰を登る

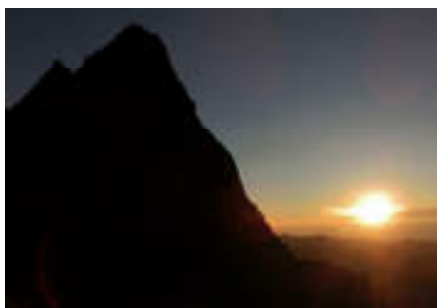


槍ヶ岳山頂直下の鉄ハシゴを登る

岩礫帯の登山道を白ペンキのしるしを頼りに登る。坊主岩脇を抜け、殺生ヒュッテで昼食を摂る。ミヤマダイコンソウ、イワギキョウ等の高山花が咲く岩礫の東鎌尾根を登り続け、PM12：00 槍ヶ岳肩に登り出る。肩から高度差 100mの槍岩峰が北方間近にそそり立ち、大勢の登山者がその岩壁に米粒のように取り付いている。



槍ヶ岳山頂に登頂



快晴の朝を迎える

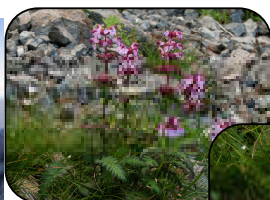


いざ、槍ヶ岳肩を出発

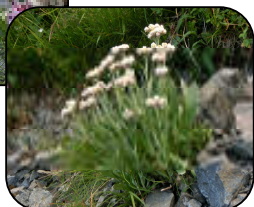
荷を置き、早速私達も槍ヶ岳山頂を目指す。岩壁に足場を捉え、手がかりを探し登る。鎖を掴み、長い鉄ハシゴを登り切ると PM2：30 槍ヶ岳山頂 3180mに全員登頂する。「おめでとう！」縦走最初の 3000m峰だ。霧が深く山頂からの展望は全く効かない。20 分ほど留まり岩場の降下を開始、PM3：30 槍ヶ岳肩に帰還し泊す。



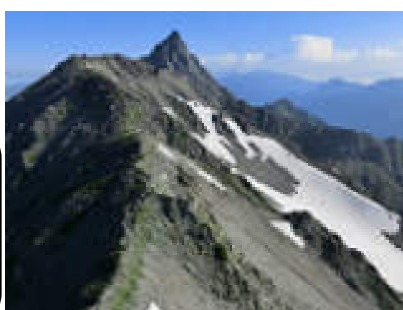
大喰岳の登り



ヨツバシオガマ



タカネヤハズハハコ



中岳から槍ヶ岳を展望

8 月 15 日快晴の朝を迎える。AM6：00 槍ヶ岳肩を出発、岩稜線の縦走路を進む。北方に天を突く槍ヶ岳を望み、一旦飛騨乗越に下り、再び岩礫の登山路を登り続けると、AM7：00 広い頂上を持つ大喰岳 3101mに登頂する。大喰岳からは、ヨツバシオガマ、タカネヤハズハハコ等の高山花の咲く、緩やかな岩稜線を降り、鞍部から中岳の登りにかかる。

岩峰の岩場を攀じり、鉄ハシゴを登り詰めると、AM8:00 中岳 3084mに登頂する。北方を振り返ると一段と高く聳える三角錐形状の槍ヶ岳の姿が美しい。頂上から整備された岩場道を 20 分程降りた雪渓の水場を通過し、チシマギキョウ咲く緩やかな稜線を辿り、横尾尾根との分岐を通過して、AM8:45 南岳 3033mに登頂する。そこから 10 分程下山すると PM9:00 南岳小屋に到着する。



槍を背景に南岳を登る

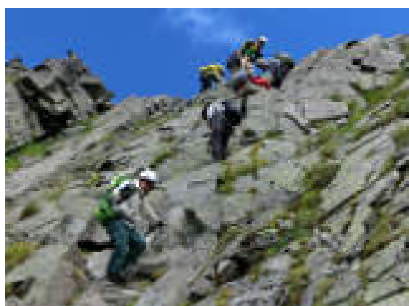


大キレットの急峻な岩場の降下



長谷川ピークの登攀

南岳小屋で小休止して AM9:15 出発。縦走路最大の難所、大キレットへ降下を開始する。ガラ場状の岩礫帯を過ぎると、急峻な岩場の降下が続く。岩場のわずかな凹凸にスタンスを確保しながら、手がかりを確実に捉え、慎重に下山する。最下部の長い鉄ハシゴを降り、最低鞍部付近で小休止する。降りてきた大絶壁を、振り返り見上げると、身震いする程だ。



長谷川ピークからの降下



A 沢のコルから休止後、岩壁を登る。



飛驒泣きの岩場を乗り越える

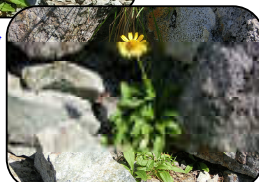
最低鞍部から岩稜線を登り、いよいよ長谷川ピークの登攀にとりかかる。取り付けられたクサリや金具も頼りに、切り立った岩場を降りていく。A 沢のコルで小休止後、絶壁に近い岩壁を登り続ける。



満杯の力を振り絞って北穂頂上へ



イワギキョウ



ウサギギク



北穂高岳に見事登頂する

しばらくで“飛驒泣き”と呼ばれる切り立った岩峰を、鎖を使い、可能な限りの力を振り絞って体を持ち上げ、乗り越える。その上部で小休止し、見上げると、滝谷の大障壁がさらに一層高く、眼前に迫ってくる。

落石に注意し、急斜面の岩稜を 30 分程ジグザグに登り詰めて登ると PM12:30 北穂高小屋にようやく辿り着く。小休憩後、小屋脇の岩階段を登り、PM1:00 北穂高岳 3106mに登頂する。

北穂高岳からは急峻な岩尾根を進む。この頃から上空には、雲が湧きはじめ湿っぽい霧が舞う。稜線西側の眼下を覗けば、「鳥も通わぬ滝谷」といわれる高度差 1000m の大障壁が落ち込んでいる。最低鞍部からは、落石に注意して絶壁を攀じり、涸沢槍を経て涸沢岳への最後の難関に挑む。



クサリを頼りに絶壁を降下する



涸沢岳への難関を登る



涸沢岳山頂に全員登頂する

しばらくの登攀の後、岩溝のクサリを頼りに、満杯の力を使って体を迫り上げると、涸沢岳山頂へ続くなだらかな稜線に登り出る。PM3:45 涸沢岳山頂 3110m に全員登頂する。「おめでとう!」。皆、難関を乗り越えた安堵の笑顔が見れる。PM4:30 穂高山荘に到着、泊する。一息ついた頃、各人、今日の登攀の思いを胸に祝杯の美酒に酔う。



東の空を橙色に染めて朝陽が昇る



岩稜線を登り、奥穂へ向かう。

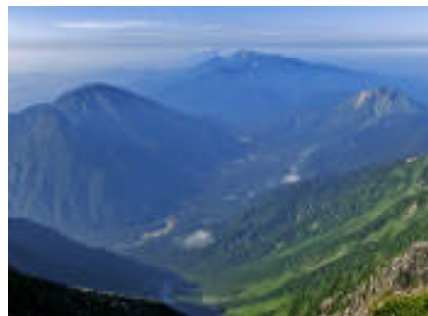


稜線の右にジャンダルム 3163m を望む

8 月 16 日東の空を橙色に染めて朝陽が昇る。AM6:30 準備を整え、奥穂高山荘を出発。いきなりの 50m 程の岩壁を攀じるとなだらかな登りの岩礫帯のジグザグ路を行く。稜線を進むと、道標と祠が見えてきた。AM7:30、北ア最高峰奥穂高岳 3190m に全員登頂する。山頂からは 360° の大展望。南にジャンダルムの大岩峰、白煙上げる焼岳、霞沢岳の谷間に蛇行して流れる梓川、その彼方に乗鞍岳、御嶽山が続いている。北方には、この 3 日かけて歩いてきた、穂高峰々そして槍ヶ岳。私達は、熱い感慨を胸に眺望する。



奥穂高岳山頂 3190m に見事登頂



南に、梓川が流れ乗鞍、御嶽を望む



奥穂高山頂から北を望む

AM8:00 吊尾根の岩稜線をトラバース気味に前穂高岳へ向かう。岩陰にヨツバシオガマ、ウサギギク等の高山花が咲く岩稜線を注意しながら進む。AM9:30 紀美子平に到着。ここに荷を置き、軽荷で山頂に向かう。AM10:00 前穂高岳山頂 3090m に全員登頂する。「おめでとう、頑張りましたね」3000m 峰 8 座目となる山頂に皆感慨もひとしおだ。



奥穂山頂からのジャンダルム



吊り尾根と前穂高岳



吊り尾根を前穂へ向かう



紀美子平に荷を置き、前穂へ登る



3000m峰8座目、前穂高へ見事登頂



紀美子平からの急斜面の降下

AM11:00 紀美子平から下山開始。いきなりの岩稜の急斜面も、慎重に下降。PM2:00 岳沢ヒュッテへ到着。ここで中休止して昼食後、森林帯の緩やかな下山路を下る。PM4:00 上高地の登山口へ到着。「おめでとう！」登山道から林道に出て、皆ほっと安堵の笑顔を交わす。



岳沢を下山し、上高地の登山口へ到着「おめでとう！」

観光客でごった返す河童橋付近を通過し、混雑の中、全員タクシーに乗り込み、PM4:30 上高地を後にする。PM5:00 沢渡駐車場に到着。車に乗り合わせ、帰路を急ぐ。PM6:00 松本で最終解散としました。

「岳人憧れの難ルートを踏破した参加者皆様の勇気と情熱に敬意を表すると共に、皆様にとって、これからの登山人生に、大きな自信となる。」事でしょう

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

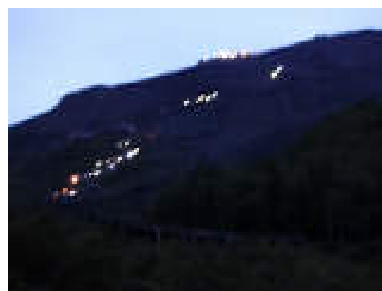
8月22日参加者5名が車に乗り合わせ、AM8:00松本を出発。好天の中央高速道を走り、大月JC経由で河口湖ICにて降りる。富士スバルライン入り口付近で、専用シャトルバス乗車方面に誘導されるように、案内に従いAM10:30大駐車場に車を置く。AM11:15シャトルバスに乗りスバルラインを登る。



佐藤小屋



夕方、眼下に河口湖を望む



夜明け頃7合目を登るライト

AM12:00、五合目駐車場に到着。天候は高曇りだが、眼下に河口湖、山中湖を望む事ができる。林道を下りPM12:30五合目佐藤小屋2350mに到着、泊する。昼食後、体調を整える為六合目に登る。

そこは五合目駐車場からの道の合流場所となり、頂上を目指す登山者は、霧雲の中に数珠つなぎになって徐々にその姿が消えていく。夕食は、佐藤小屋特別メニュー、熱い溶岩板で焼く牛焼肉で精力を摂る。明日の天気を期待して早めに就寝する。



朝焼けの夜明けを迎える



7合目から8合目への辛い登り



9合目付近の鳥居を潜る

翌23日、AM2:00起床、夜空に星が瞬く天候。AM3:00準備を整え、暗闇の森林帯の中、全員ヘッドランプを照らし登り始める。六合目から溶岩砂礫帯をジグザグに登り、徐々に白む七合目溶岩質の岩場の登りで、朝焼けに燃える夜明けを迎える。

7合目の長い岩礫帯の登山道を登り続け、8合目3000mで中休止して、佐藤小屋の弁当朝食を摂る。須走り口からの登山者と合流する本八合目に登り出ると、山頂が望まれ、元気と勇気が湧いてくる。富士山の大斜面を眼下に望みながら、9合目の鳥居を潜ると、山頂はもうすぐだ！。



登山道を一步一步登る



山頂稜線へ登り出る



最高点剣が峰3776m

階段状の溶岩道を登り、大きな鳥居を潜ると、AM10:00登山者で渋滞する山頂の稜線に登り出る。「やった！」一休み後、お鉢巡りをして剣が峰の最高点を目指すこととする。時計回りに外輪コースを進み、噴

火口を右眼下に望み、御殿場、富士宮ルートの合流ルートを目を左に見て進み、赤茶けた急坂を、残りの力を振り絞るように登り詰めると、AM11:00 日本最高点剣が峰 3776mに到達する。「おめでとう！」皆笑顔がほころび、今までの艱難辛苦がこの一瞬で報われる思いで胸がいっぱいようだ。



日本最高点富士山剣が峰 3776 に見事全員登頂



富士山の火口と剣が峰

剣が峰で 20 分程の憩いの後、富士山の御鉢巡りの残コースを半周して吉田口山頂へ向い、山頂小屋で温かい昼食を摂り、PM1:00 下山を開始する。専用の砂礫道の埃っぽい下山路を降り続け、PM3:00 五合目佐藤小屋に到着する。お世話になった小屋の主人へ挨拶をして、PM4:00 全員臨時シャトルバスに乗り込み、専用大駐車場へ向かう。PM5:00 駐車場から再び車に乗り合わせ、河口湖 IC から中央高速道を走り、PM7:00、松本へ到着。最終解散とした。

「気高く、厳しくそして大きな日本一の富士山、その頂に立ち、登頂を果たしたと誇れる」登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

9月1日、AM5:00 参加者8名が松本方面を出発。見上げる天候は曇り空。市営扇沢駐車場で3名が合流し、総勢11名となって、準備を整えAM6:30 登山口を一行縦列で出発する。森林帯の中、整備されたジグザグの急登路を登る。徐々に高度を上げると、それでも秋の花として、道端にオヤマリンドウ、実を付けたゴゼンタチバナなどの見る事ができる。



オヤマリンドウ



森林帯の中、整備された急登路を登る。

実をつけたゴゼンタチバナ 種池山荘直下を木段の急坂を登る

尾根筋を離れて山腹を巻くように登り、ダケカンバの林を抜け、岩石帯を滑らぬように登ると、山斜面一帯紅葉したチングルマが広がる種池山荘に、AM11:30 到着する。辺り一面は、霧が覆い遠くの視界が効かない。



紅葉したチングルマ



爺ヶ岳の登りから種池山荘を望む



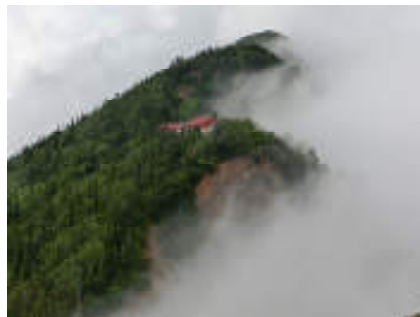
岩礫道を爺ヶ岳へ向かう

ここで中休止して昼食を摂り、身支度を直してPM12:30 出発。霧が流れる中、岩礫道を小1時間登ると、三角錐の山頂が姿を現してくる。PM1:30 爺ヶ岳南峰 2670mに全員登頂。さらにコマクサの咲く砂礫帯を抜け 30 分程で中峰 2670mに全員登頂する。

ここからハイマツ帯の尾根道を辿り、赤岩尾根との分岐を右に見て下り、シラビソの林の中を登るとPM3:00 冷池山荘到着、泊す。登山中、鹿島槍ヶ岳は、雲間に漸くその姿を現した。



爺ヶ岳南峰 2670mに全員登頂



雲間に見え隠れする冷池山荘



ヤマハハコ



アキノキリンソウ

9月2日、AM6:40 冷池山荘を10人が軽荷で出発。足の筋肉を傷めた参加者1人は種池山荘へ、一足先に下山する事とした。山頂を目指す10人は、灌木帯を過ぎると15分程でテント場を通過する。緩やかな登りの稜線には、紅葉したチングルマが広がり、アキノキリンソウなどの秋の花々が咲いている。



しばらくゆるやかな登りの稜線



トウヤクリンドウ



布引山のジグザグ道を登る



目指す鹿島槍ヶ岳



姿を現した山ガラス



山頂を目指して岩礫帯を登る

ハイマツに覆われた布引山のジグザグ道を登ると、トウヤクリンドウが咲き残る山頂へ登り出る。ここから、岩稜線を辿り、急な登りのガラ場を転ばぬように登り詰めると、AM8:40 鹿島槍ヶ岳山頂 2890m に10名全員登頂する。「おめでとう！」皆笑顔で握手を交し合う。山頂からは、薄曇りながら360度の大展望、北方に重厚な五竜岳が聳え、西に青く屹立した岩峰で、剣岳がそそり立っている。



鹿島槍ヶ岳山頂 2890m に10名全員登頂する。



北方に重量感のある五竜岳を望む

20分程山頂で憩い、下山を開始する。AM11:00 冷池山荘に戻り、荷を詰め直して出発する頃、とうとう本降りの雨となり、先を急ぐ。PM1:00 種池山荘で昼食を摂り、PM1:30 昨日と同じ往路を下り PM5:00 登山口へ到着する。PM6:00 扇沢駐車場、PM7:00 松本で解散とした。足の筋肉を痛めた参加者1人は、種池山荘からサポートを受けて PM7:30 登山口到着。PM9:00 前松本で解散とした。サポート隊ご苦労様でした。

「天候が変わり易い、冷雨の中の秋山山行、それでも登頂の喜びを味わった登山講習だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

2015MHC 登山講習 紅葉の涸沢・奥又白に行く

9月27日 AM6:30 参加者6名が松本を出発。沢渡で2名が合流し総勢8名となって、2台のタクシーに同乗し上高地へ向かう。雲間に青空を仰ぐ天気模様。新釜トンネルを抜け、シラカバ林の車道を廻ると、上空、雲に覆われた穂高岳が望まれる。バスターミナルの広場で全員準備を整え、AM8:15 出発する。森林帯の林道を、明神、そして徳沢を通り過ぎると、徐々に雲が上がり、梓川畔から対岸に聳える前穂高北尾根を眺めながら歩き進む。AM11:45 穂高岳と槍ヶ岳の分岐点横尾に到着する。



上高地から林道を行く



屏風岩大障壁を仰ぐ



本谷橋から急坂を登る

横尾の木陰で昼食後 PM12:30 涸沢を目指し出発。河原を30分程歩くと、左手に屏風岩の大障壁が望まれる。PM1:50 沢が合流する本谷橋に到着。小休止後、急坂の岩道を1時間も登ると、赤く色づくナナカマドの低木帯が広がり、穂高岳の稜線が間近に迫ってくる。PM4:00 涸沢ヒュッテに到着、泊する。早い夕食後、吊尾根の彼方に夕日が沈み、徐々に翳ると、涸沢小屋の灯りが一層照らし出され、色とりどりのテントが張られた涸沢が静かに暮れていく。



色づく涸沢を登る



ナナカマドが真っ赤に燃える涸沢

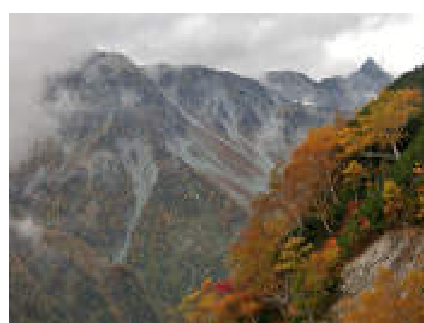


朝陽に照らされる北穂と涸沢テント場

9月30日、高曇りの朝を迎える。AM6:00 を過ぎると陽が昇るが、秋色の穂高岳を輝かせるほどでもなかった。それでも、皆場所を選びながら写真撮影に忙しいようだ。準備を整え AM7:00 難路パノラマコースに行く。岩場を攀じり、ガラ場をトラバースして振り返ると秋色に彩られた涸沢カールが眼下に広がり、涸沢岳、奥穂高岳が高く大きく望まれる。



振り返る涸沢カールが美しい



屏風のミミの岩稜線を登る



屏風のミミ 2565mに見事登頂

AM8:10、北尾根末端の稜線に登り出ると、東側正面には、常念岳、蝶ヶ岳のなだらかな稜線が目飛び込んで来る。屏風のコルからは、軽荷となって、目指す屏風のミミに向かう。岩尾根を登り、赤黄に紅葉した

岩稜線を這うように詰めると、AM9:00 屏風のミミ 2565mに全員登頂する。「おめでとう!」。しばらく休憩して、目の前にそそり立つ豪快な穂高岳の峰々を仰ぐ。北穂高岳絶壁から続く、切り立つ大キレットの北方には三角錐形状の槍ヶ岳がひとときわ高く、天を突いて聳えていた。



涸沢の紅葉



北方に、天を突く槍ヶ岳を望む

AM9:30 下山を開始、再び屏風のコルに戻り、下山ルートを徳沢へ向かう。滑りやすい岩道に足場を注意しながら降りていく。AM12:00 奥又白池への分岐で中休止し昼食を摂り、その後30分程下ると、登山口へ到着する。林道を歩き、梓川に架かる新村橋を渡り、徳沢を経由し、PM3:30 上高地にようやく辿り着く。上高地からは往路と同じようにタクシーに乗り、沢渡を経由してPM5:30 松本へ無事帰還する。

「いつまでも忘れられない、紅葉に彩られた涸沢と屏風のミミからの大迫力の峰々に、大感動」の登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

2015MHC 登山講習 焼岳登山と紅葉の上高地散策

10月24日(土)AM6:00 参加7名が松本を出発。沢渡で2台のタクシーに乗り込み、安房峠途中の焼岳登山口へ向かう。天候は快晴。新安房トンネル手前で右へ曲がり、車は蛇行する急坂道路を登り、7曲り目の中の湯温泉を通過し、11回目の曲りで下車、登山口によりやく到着する。

登山口前で準備を整え、AM7:30 出発する。紅葉に色づく森林帯の急坂を登る。旧中の湯ルート of 合流点を通るとダケカンバの低木帯が立ち並び、熊笹茂る広場に出る。展望が開け、見上げると山頂近くから白煙が昇っているのがすぐ近くに望まれ、硫黄臭もしてくる。



紅葉に色づく登山道に行く



ダケカンバ上空に山頂を仰ぐ



山頂近くから上がる白煙

ここから、ゴロゴロした岩場の山肌を、ジグザグに1時間強程登ると、北峰、南峰の山頂を結ぶ尾根に登り出る。眼下に窪み状の火口があり、右に聳える北峰 2444m 脇から、白煙が勢いよく噴き上げている。左に聳える南峰 2455m は登山禁止となっている為、北峰目指して白煙吹き出す脇の岩場を登り、AM11:30 北峰に、見事全員登頂する。



山頂近くの岩場を登る



北峰 2444m に見事登頂



快晴の朝、上高地から焼岳を望む

山頂からは、西に笠ヶ岳 2898m から双六岳への重厚な稜線が連なる。下に望む上高地からは、豪快にそそり立つ穂高岳の威容が望まれ、岩稜線の北方に、突起状の岩峰槍ヶ岳を遠望する。うらかな日との山頂で30分程昼食を楽しみ、下山を開始する。小一時間で峠に建つ焼岳小屋を経由して、岩場の急斜面では、取り付けられたハシゴを駆使しながら降下する。

下山する正面には、秋色に染まる霞沢岳 2646m が快々しく美しい。しばらくで緩やかな傾斜の唐松林を歩き続け、PM3:45 登山口に到着。梓川畔を歩き PM4:10 今日の宿市営上高地アルペンホテルに到着、泊る。



河童橋からの秋の穂高岳



カラマツの落葉に埋る梓川左岸に行く

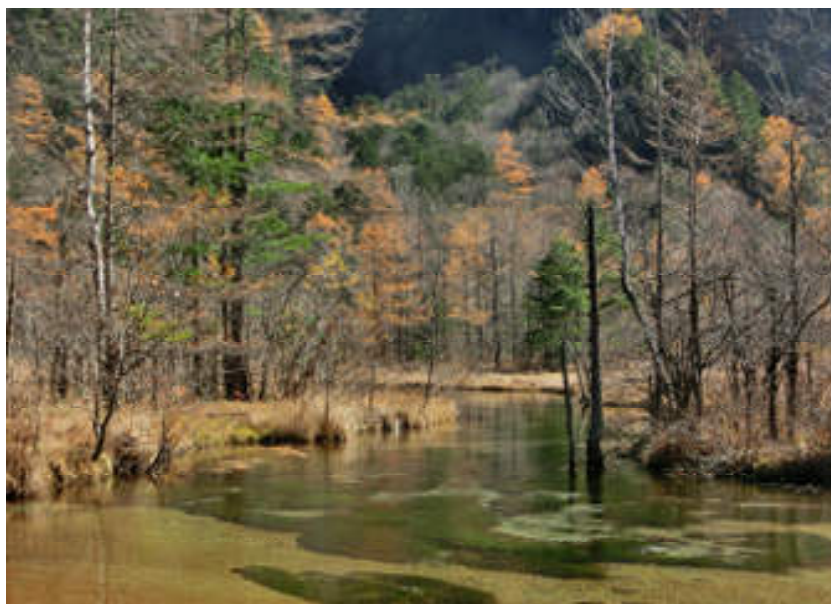


帝国ホテルと新雪の穂高岳

10 月 25 日(日)快晴の朝を迎える。AM8：30 ホテルを出発し、河童橋を經由して梓川左岸に行く。槍ヶ岳を水源とする梓川の清流が流れる上高地、その川に架かる河童橋周辺から、秋色に染まる穂高岳、焼岳を望む。ここからカラマツの落葉がジュータンのように敷き詰められた梓川左岸を歩き、途中、林を通り抜け、帝国ホテルへ向かう。帝国ホテル喫茶室では、熱いコーヒーと上等なケーキで、私達の焼岳登山を祝った。



山頂からの大展望、穂高岳と上高地を望む。



田代湿原の清流の流れ

帝国ホテルから、田代橋を經由して、20 分程で田代湿原に到着する。そこは、清水が流れ、自然の奥行きを感じさせる。多くのセミプロ写真家が三脚を立て撮影をしていた。湿原を抜けて進むと、豪快な焼岳を望む大正池畔に辿り着く。観光者も大勢訪ねてくる賑やかな場所だった。

大正池畔で、豪勢なホテルの昼食弁当に舌づつみを打つ。そこから 2 台のタクシーに乗り、沢渡を經由して、PM2：30、松本に全員無事到着、解散とした。

「白煙上がる焼岳に登り、紅葉に彩られた上高地を散策した思い出深い大感動」の登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

2015MHC 登山講習 新雪の常念岳登山 報告

10/31(土) AM6:30 安曇野合同庁舎駐車場に5名が集合し、1台の車に同乗して出発。天候は曇天模様。紅葉する常念山麓を登り、一ノ沢登山口へ向かう。登山口で準備を整えAM7:40 一列縦列で出発する。10分程進むと、樹齢400年の榎の木が立つ“山の神”に到着。手を合わせ登山の無事を祈る。



山の神で合掌



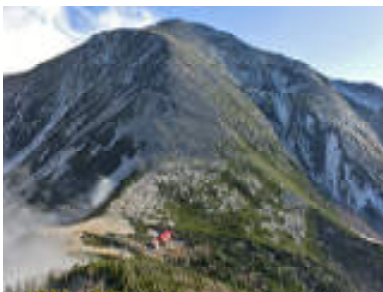
胸突き八丁を登る



常念乗越に登り出る

枯葉が降り積もる唐松林の山道を2時間も登ると沢が合流する笠原に登り出る。展望が開け見上げると、僅かに新雪を頂く常念岳を望む。ここから右岸に渡り、川沿いの凍りついた急な登りを進む。再び左岸に渡り山腹の巻き道を滑らぬように注意して登り、1時間程で最後の水場に到着する。

小休止後、森林帯の急な登山道を、一步一步登る。木々の間からは常念岳山頂へ続く、うっすらと新雪頂く豪快な稜線が迫ってくる。第一ベンチ第二ベンチと休憩を楽しむように登り詰めると、PM12:00 冷い風が吹きつける乗越にようやく登り出る。展望が開け正面に新雪の槍ヶ岳・穂高岳連峰が大迫力で迫ってくる。



横通岳中腹から望む常念岳



朝日に輝く槍ヶ岳



常念岳山頂を示す道標

常念小屋で昼食後、PM1:30 横通岳方面に登ることにする。横通岳中腹まで登り、穏やかな午後の展望を楽しむことにする。南に快々しい常念岳を望み、西に槍ヶ岳から穂高岳の稜線を展望し、夏に歩いた稜線の起伏の岩場に想いを馳せる。大キレットの最低鞍部の彼方に、白銀の加賀の白山を遠望する。



山頂付近から富士山を望む



九合目上部の雪斜面を登る



穂高岳を背景に常念岳山頂に登頂

11/1(日)、快晴の朝を迎える。槍ヶ岳から穂高岳の稜線が、赤く燃えるように輝く。準備を整え、AM8:00 常念岳山頂目指し出発。冷たい西風が吹き続け、常念岳山頂を記す道標だけが毅然と立ち尽くしている。岩がゴロゴロと積み重なった岩道に、歩行もままならないが、所々凍りついた新雪をしっかりと踏んで登る。

七合目の岩場で風を避け、小休止、前方を仰ぐとうっすらと雪化粧した山頂が望まれる。九合目上部の新雪を被った急な斜面を登り切り、なだらかな稜線を辿ると、AM9:15 祠と道標の建つ常念岳山頂 2857mに全員見事登頂する。「バンザイ！」

山頂からの展望は、360 度の大展望。この頃から、山頂は無風状態、西南の正面に豪快な穂高岳連峰が重鎮し、東に南アルプスの高峰脇に富士山を遠望する。30 分程留まった後、下山開始、AM11:00 常念小屋へ帰還する。



朝日に輝く槍ヶ岳から穂高岳稜線。



山頂から望む、新雪頂く穂高岳連峰

常念小屋で早めの温かい昼食を摂り、PM11:45 下山開始、PM3:45 登山口到着。PM4:15 安曇野合同庁舎駐車に帰還し解散とした。

「勇気を奮って登った新雪の常念岳は、登山者する心に大きな自信を与えてくれる」登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

2015MHC 登山講習 新雪の燕岳 2763mと温泉 報告

11月21日(土)AM6:30、県安曇野庁舎駐車場に12名が集合、2台の車に同乗して出発。天候は曇り空。道路凍結を心配しながら溪谷沿いの蛇行道を中房温泉へ向かう。道路上に積雪は無く、拍子抜けしながらAM7:30中房温泉入り口手前の駐車場に到着。準備を整えAM8:00、全員冬山装備を着用して出発する。



林の中、雪の急坂を登る

合戦上部、雲海上遠く富士山を望む

花崗岩砂礫道の支稜線を登る

森林帯の中、凍てつく急坂を第一、第二ベンチと、ほぼ30分毎に小休止をしながら登る。例年なら積雪のある第三ベンチにも雪が無く、林の中の急坂を登り、一気に高度を上げる。遠望の効かない富士見ベンチを通り抜け、PM11:50無雪の合戦小屋に到着。小屋閉め前の様子の中、室内のテーブルで、昼食を摂る。

中休止の後、低木帯の登山道を登る途中、南西方向に岩峰槍ヶ岳を望む。20分程で主稜線に続く尾根に登り出ると展望が効き、その雪尾根道の高みに燕山荘が望まれ、その右奥に目指す燕岳が聳えている。急な勾配の無雪の尾根を一步一步登り詰めPM1:45燕山荘へ辿り着く。



支稜線から無雪の燕岳を望む

急な斜面の山腹を一步一步登る

燕山荘玄関前、全員で記念撮影

早速宿泊手続きをして、中休止後思案し、明日の悪天候を懸念して、早速山頂を目指す事にする。PM2:30、冬山装備を着用し、凍てついた花崗岩砂礫をしっかりと踏んで登る。振り返ると南に山容の大きな大天井岳2922m、天を突く槍ヶ岳を望む。林立する花崗奇岩石の間を通り抜けると、PM3:10燕岳山頂2763mに、見事全員登頂する。「おめでとう！」



奇岩が林立する燕岳

山頂直下の岩場を登る

PM3:10凍てつく山頂に見事登頂

山頂からは、西に鷲羽、水晶岳、北方には、北燕岳、その後方に立山、剣岳の白銀の峰々が連なり、東の雲海上には、浅間山、八ヶ岳、富士山、南アルプス連峰がシルエット状に遠く望まれる。

皆と登頂の喜びを分かち合った幾つものピーク、思い出の山々に感慨を深くする。冷風の中、15分程山頂に

留まった後、往路を引き返し PM4：00 山荘に帰還する。

11 月 22 日(日)AM6：00 起床。東の空に厚い雲が覆い、期待した日の出を拝むことができなかった。西に望む北アルプスの峰々も灰色の雲に隠され望む事が出来ない。北方、燕岳が流れる霧雲に見え隠れしている。



花崗奇岩「イルカ岩」と槍ヶ岳遠望



東の谷間に埋る白雲

AM8：10、燕山荘に挨拶をして、往路と同じルートで下山を開始する。花崗岩砂礫の下山道の滑落を注意しながら支稜線を下る。合戦小屋からは、森林帯の急坂を慎重に降り続け、AM1：30 登山口に到着する。

登山口駐車場近くの有明荘で一汗を流した後、カツどんぶり等で腹を満たし、PM2：30 再び 2 台の車に分乗し、往路と同じ道を走り、PM3：30 県安曇野庁舎駐車場に無事帰還、最終解散とする。ご苦労様でした。

「珍しく雪の無い初冬の登山であったが、その厳しさと美しさを学んだ新雪の燕岳登山講習だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則



「ハクサンイチゲ」

MHC 登山講習「剣岳」から 2015. 8 撮影 鈴木雅則